

健康教育

題字 薬学博士 河合 龟太郎

中学・高校生の栄養…………… 2

健康教育の基盤に立つ天神体育…… 4

小・中・高9ヵ年における
個人別視力の推移に関する考察…… 6

☆ 健康、栄養問題講習会における
——母親学級の表情——

No. 18

千葉県千葉市中央区新富町
千葉県立第一養正小学校にて



中学・高校生の栄養

九州大学医学部教授

遠城寺宗徳

まえおき

小児の栄養と成人の栄養との違う点は、第1には小児においては発育という生活現象があること、第2には小児の体質が大人と異なっておるという、2つの点があげられる。

ところが、中・高校生の時期は、成長も最も旺盛な時期であり、また、体質の変換もいちばん著しい時期であるが故に、この時期の栄養はきわめて重要な意義をもつのである。ところが実際についてみると、栄養といえは、乳児の栄養、幼児期の偏食の問題や小学校の給食のことが、力説せられ、給食をはじめ、栄養問題は、中・高校にいくにつれて、粗略にあつかわれている現状である。これは大変な間違いである。それでここでは中・高校生の栄養の重要性と、その問題点についてのべてみたいと思う。

1. 肥料のやり時

作物に「肥料のやり時」というのがある。肥料をやるにも、適切な時期にやる必要があるで、作物の発育、従ってその収穫に非常に関係することは一般に知られたことである。小児の栄養についてもこれと同様の関係がみられるのである。即ち発育と年齢を考慮して、適した時に与えられることが、ききめが大きいのである。

乳児期の発育は、人間の発育のうちで最も旺盛な児期である。従ってこの児期の栄養はきわめて重要なもので、幼児はあの小さい体に驚く程の量のお乳を飲むわけである。実際、所要カロリーにおいても、乳児は体重1kg当り100以上のカロリーを要する。また発育に必要ないろいろの成分、蛋白、脂肪、含水炭素の他にカルシウムその他の成長電解質を充分含んだ乳汁を主食とするのである。

ところが幼児期になると、その発育は最も鈍い児期なので、幼児においてはあまり食欲が旺盛でなく、食事をする時も遊び半分に食べて、乳児の時のように一生懸命に乳を飲むような態度がみられないのは、発育成長に対する栄養がそんなにたくさんいらぬからで、これを幼児の生理的食欲不振というのである。こういう時期に母親達は「もう少し食べよ、

何々を食べよ」と無理に子供に食事を強いることが多い。これが偏食問題とか、何も子供は食べない、食欲不振だといった訴えになるのである。

ところが、8才から10才前後の学童期になると、また発育が旺盛になり、特に身長が多く伸びる児期である。これを第2次伸長期ともいう。

更に身長、並びにその他の筋肉あるいは精神的発育の非常にめざましく発展してくるのは、12~3才から18才位の思春期である。

思春期は分けて、第Ⅰ期——即ち思春前期、これは女兒においては10½~13½年、男児においては12~15年、第Ⅱ期——普通これを、春機発動期というのであるが、女兒においては13½~16年、男児においては15~17年である。これでみるように、思春期は女の方に男児より1~2年早く、且つ長くつづくのである。

その後、春機発動期の進行中を青年期(Adolescence)という。女兒においては15~16年から18~19年、男児においては17~18年から19~20年である。このように、普通思春期は、思春前期(第Ⅰ期)と思春第2期と青年期(Adolescence)との3期に分けられ、全く中・高校生の時代に相当するのである。

この時期においては、身体発育ことに身長の伸び、特に四肢の長さの伸長がきわめて旺盛であることが特徴であると同時に、全ての身体器官の機能や精神機能が飛躍的発達をとげる時期である。よってこの時期こそ成長の源泉となるべき栄養が最も重大性をおびる時期なのである。即ち、人間の栄養について、中、高校生の時代の栄養ということは非常に大切なことである。従って私共が常に主張していることは、学校給食、或は栄養に対する考慮というものは、すでに述べた如く乳児から年次成長するに従って、世の関心や親達の努力がうすらぐ。けれども、むしろこの中・高校生の栄養こそいちばん力を入れなければならないことで、これがまたその人の一生をも支配するということができるのである。

2. 中・高校生の栄養

中学・高校の生徒は実によく、気持のよい程ご飯を食べるものである。我々の少年時代にもまだ食べるのかといわれる位に大いに食べたものであるが、考えてみると従来の中・高校生は、いわゆる「大飯食らい」というのであって、主として米飯を食べ、すなわち含水炭素過食であって、成長生活に最も必要なところの蛋白質ことに動物性蛋白及び骨、身長の旺盛なる増加をまかなうところのカルシウム等のとりかたが非常に少かったのである。この時期においては特に蛋白、カルシウムそれから血液のもととなる鉄分等が最も大切なのである。

従来、日本人の身長の低いことは、この時期における蛋白、カルシウム等のとり方が不足していたことが大きな原因と考えられる。

近年、青少年の身長が伸びてきたことは、これらの栄養の改善に負うところが多いと思う。またこの時期にはビタミンB₁が不足しやすい。大飯食らいの青少年においては含水炭素、米食過食となり、含水炭素の新陳代謝に必要なビタミンB₁を充分とることが必要である。これが不足するために青年に脚気が多かったのであるが、これも近年、栄養の進歩に従ってほとんどなくなった。

カルシウムについては、この思春期には、1日に少なくとも1.3gはとらなければならない。これを牛乳で補給するとすれば1日に少なくとも6合の牛乳を飲む必要がある。もし牛乳を6合飲み得ない場合は、不足分はカルシウム剤で補うことが必要であろう。パン等にカルシウムを混合するのもよいであろう。

さらに、カルシウムの吸収ならびに沈着にはビタミンA及びD、殊にDがどうしても必要であることは周知の事実である。従って、この思春期すなわち中・高校時代においては、充分なるビタミンA・Dをとることが必要である。

私は常に中・高校生に牛乳を飲ませるようにとすすめておるが、肝油剤の補給は小学校より中・高校生にこそ大いに与えらるべきものと思う。小学校の4.5年の頃すなわち8才から10才頃の第2次伸長期も牛乳や肝油類のやり時である。外国ことにアメリカでは、家庭で、牛乳をお茶の如く飲むということはこの要求に応じたものである。

最後に蛋白質であるが、蛋白質をこの時期に充分与えることが成長活動を充分にする所以であることはいうまでもない。この時期には中・高校生時期においては全カロリーの15%は蛋白から、即ち蛋白は1日に90乃至120gはやらなければならない。これを満すには牛乳を日に6合、卵1個その他の肉類を充分に与える必要がある。

以下示すところの表は、アメリカ著名のネルソンの小児科

教科書にてしている思春期における献立表であるが、わが国の食習慣と多少事情は違っても参考になると思うので、あげてみる。

青年期のために必要な蛋白質とカルシウムの標準食卓

		グラム	蛋白質	カルシウム
グラス1杯	オレンジ・ジュース	115		0.0033
カップ1杯	オート・ミール	200	4.	0.0220
1 個	半熟卵	50	6.	0.0330
1 切	パン(トースト)	30	3.	0.0150
1 角	バター	10		0.0015
グラス1杯	ミルク	200	6.	0.2400
#	チョコレート・ミルク	200	6.	0.2000
焼き肝臓(レバー)		70	13.80	0.0084
大きじ1杯	肉汁	15		
大きじ5杯	じゃがいも料理(マッシュポテト)	100	2.50	0.0280
大きじ3杯	ふだんそう(ビート)	70	1.75	0.0190
1 切	オレンジ・グレイブ・フルーツ	40		0.0120
1 切	サラダ菜(レタス)	15	0.25	0.0064
大きじ1杯	マヨネーズ	15	0.20	0.0020
1 切	パン	30	3.	0.0150
1 角	バター	10		0.0015
大きじ5杯	チョコレート・プディング	100	3.5	0.1020
グラス1杯	ミルク	200	6.0	0.2400
#	果物ジュース(フルーツジュース)	110		
カップ $\frac{1}{2}$ 杯	きのこのクリーム・スープ	100	2.4	0.0200
大きじ4杯	チーズの焼料理(チーズ・スフレ)	100	20.30	0.3252
#	えんどう豆	60	1.5	
3 切	トマト	25	0.25	0.0028
1 切	サラダ菜(レタス)	15		0.0064
大きじ1杯	マヨネーズ	15	0.20	0.0020
1 切	パン	30	3.	0.0150
1 角	バター	10		0.0015
1 本	バナナ(大)	120		0.0108
グラス1杯	ミルク	200	6.	0.2400
計			95.45	1.8599
全カロリー		2,750カロリー		

この食事の重要点は

1. 1ℓ(6合)のミルクを
2. 3度の食事の全てに蛋白源を入れること
3. ビタミンD(1000単位)を与えること

この表にもみられるように、牛乳を充分にやることと、チーズは、日本の食生活においてはあまり用いないけれども、中・高校生時期にはチーズをもっとやりたいものと思う。これらには蛋白、カルシウム等が非常に豊富に含まれているからである。

むすび

1964年の東京オリンピックに備えていろいろな準備、努力がされているそうであるが、要はローマの大会において切実に痛感されたように、体格の差、体力の差をどうするかは大切な問題と思う。

新人発掘の対象が今の中・高校生にあるときく。われわれは、われらのホープ青少年の合理的栄養ということを真剣に考えなければならぬ。

健康教育の基盤に立つ 天神体育

八幡市立天神小学校 養護教諭 奥 富



教育指標
荒木大将筆

はじめに

雄大な皿倉山を背にうけ、出船入船に賑う洞海湾に連なる大八幡製鉄所を眼下におさめる我が天神小学校は、昭和5年から後述のような理由により現在まで実に30有余年間多少の曲折はあったが、ただ一筋に天神体育建設のために代々の職員が努力を続けてきた。その間天神体育のよって来る所は、健康教育を基盤としこれにより計画されまた実行されてきた。

本校の保健指導の最大目標は、「生命の尊重」である。安全指導や学校病の治療等はこの学校でも実施していることであるが、本校の場合は教児共に既に習慣化されていることが特色である。教師の一日の授業は朝の健康観察に始まり下校時の安全指導に終わる。また児童は「掃除」「手洗」「清潔検査」「傷病人の世話」等の保健活動を自主的に推進している。

I 沿革

本校は大正9年5月に創立されたが、この地に天神様のお社があるところからその名を天神尋常小学校と命名された。

★昭和5年体育的諸調査によって本校の児童は發育体力共に他校に比して劣っていることを発見したので、爾來児童の体位向上を目指して体育指導法の研究を重ねると共に運動場の拡張、体育施設の整備等に留意し、また保健面では昭和11年すでに養護学級の編成や虚弱児貧血困児のために学校給食を実施していた。このように体育と養護に留意した努力により児童の体位は著しく向上した。

★昭和12年3月には、体育振興、施設運営優秀により文部大臣より表彰をうけた。

★昭和20年8月未曾有の戦災を蒙り22教室を焼失し、児童の体位はまた著しく低下した。

★昭和22年には市内小学校に率先して、児童の体位回復のために保健体育の研究に着手した。

★昭和25年県の健康教育指定モデル校となり、体育及び給食、手洗い設備等の拡充に努力し、他方では結核管理、寄生虫予防等児童の健康管理に留意した。また学校保健委員会の

金が欲しいための殺人、交通事故による死亡などが相次ぐ世相を歎かわしく思うとき「生命の尊重」を最大目標として30有余年間、ひたむきに健康教育に精進されている天神教育の一端を紹介する。

設置や健康カリキュラムの編成をなし健康教育の向上に努力した。

★昭和26年健康教育を中心とした学校保健の推進努力により県教育委員長及び福岡県学校保健会長から表彰をうけた。

★昭和28年11月県一位健康優良学校として県教育委員会から表彰をうけた。

★昭和30年3月健康教育委嘱校として多年研究振興に努めたので県教育委員会から感謝状を授与された。

★昭和32年11月学校運営優良特に体育研究に顕著な成績をあげたかどにより福岡県教育委員会から表彰をうけた。

★本校は体育的、保健的環境の整備と保健学習の推進により、健康教育の基盤に立った天神体育を確立し、現在もなおためまぬ研究を続けている。

II 環境

1. 校区内環境

海拔624米の皿倉山麓に立つ本校は、山の手住宅街、製鉄所社宅街及び一部商店街を校区とし、家庭環境はほぼ中等度である。校区内には、製鉄所病院、済生会病院、保健所等の医療機関があり、本校保健活動に積極的協力を受けている。

2. 校内環境

児童の精神衛生を重視し「明るく楽しい学校」をモットーに全職員清掃美化につとめているが、特に校地の緑化や観察園温室の整備には、校長自ら園芸部主任となって美化整備につとめておられるので、四季の花や植物に色どられた校庭の美しさはまた格別であるが、児童の理科教育や図画指導にも大いに活用されている。

III 健康管理

学校保健活動の中で健康管理の占める範囲はきわめて大きい。しかもこの管理の仕事は、学校教育という大きな目的を果すためのものであると同時に、また学校教育そのものの一環でもある。学校における健康管理とは、児童の健康をよりよく保持増進させることであり、もし身体的精神的に疾病や

事故をおこすおそれのある場合は、学校がこれを未然に防ぐように処置することであると思う。

★健康管理の対象

1. 健康者…疾病予防 早期発見
2. 異常者…定期的検診 健康観察 健康相談
3. 校地 校舎 校具等
4. 環境衛生

★管理の実践

1. 定期健康診断

本校の校医は済生会病院長なので、各科専門別に精密検査を実施し児童個々の身体状況を把握して、これにより適切に事後指導を行なっている。

2. 健康観察

第一校時の始め十分間を健康観察の時間としてとっているが、教師の観察に児童は進んで異常のあるときは訴え出ている。担任—養護教諭—校医—家庭と連絡を迅速に行なっている。

3. 月例体重測定

各学期毎の発育測定の外に月例体重測定を実施している。

4. 健康相談

健康診断時の要注意者 観察による異常者 体重減少者
自然陽転者 その他届けのあった者は毎月校医の指導をうける。

5. 疾病予防

- ★結核……年間2回「ツ反」及びBCG接種とX線検査実施
- ★寄生虫…年間2回の検便及び駆除 予防教育
- ★眼疾……每学期検診を実施して撲滅を期しているが未だ根絶するまでになっていない。
- ★うし……歯科校医の積極的協力により年々減少しつつあるが1,2年生の乳歯未処置が多く家庭の協力を要望している。
- ★その他疾病異常を持つ児童は健康診断終了後直ちに家庭に治療勧告書を出し、保健室で手当のできるものは処置をしている。

IV 保健指導

保健教育カリキュラムを作成し月別に指導の重点をきめて指導をしているが、体育活動の多い本校の場合は特に安全指

導を重視している。

1. 校内指導

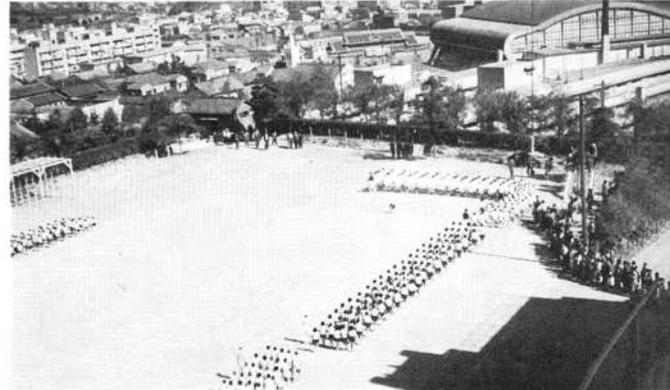
★運動場の石拾い

★運動施設用具の点検

鉄棒、登り棒、遊木、ジャングルジム等児童の使用度の高い固定施設用具は破損しやすいので、体育部委員が常に点検をしている。

★水難防止

本校の周囲には三つの大きな池があるので、水難防止には



体育の一端 行進運動

特に留意をしている。

★廊下を走らない工夫

廊下を走ることにより転倒したり足の爪さきを傷つけやすいので、廊下を走らないように要所要所には指示札をおいているが、同時に児童会を通して児童の内面化をはかり、廊下を走ることの危険性を十分に認識させている。

2. 校外指導

★安全指導

生活指導や保健学習、道徳等の各教科の領域で生命の尊さを指導し、安全指導の徹底をはかっている。

★交通道德を守る

右側通行、横断時の注意、道路で遊ばない。子供会毎にリーダーが引率して登校している。

★危険物の取扱いや危険個所に近よらない。

★大人よりの加害防止

見知らぬ人に誘われない。外出の行先きをはっきり届ける。

★傷害防止及び簡単な手当の指導

むすび

以上簡単に本校保健活動の要点を述べたが、学校保健の推進は学校のみ活動では効果をあげることができない。

児童を中心として学校保健委員会をバックアップに、学校—家庭—地域社会が協力して、始めて円滑な学校保健活動を期待できる。

然しながら児童の習慣形成は、教師のちょっとした油断にもくずれ勝ちなものである。せっかく形成されつつある児童の健康生活の良習慣をくずさないように、今後も努力を続けて行きたいと思う。



保健室の一部

本校出身福野地区生徒の 小・中・高9ヵ年における

個人別視力の推移に関する考察

富山県福野中学校 養護教諭 小西 悦子

調査内容

調査の目的

学校における近視の問題は学校保健上最も重要な課題であって、これが予防対策については日頃われわれとして深い関心をもつものである。従来小・中・高別、学年別、男女別によるいわゆる、横の統計的資料による結果を多く見受けるが、福野地区出身本校卒業生が、小学校入学以来、中学校、高等学校卒業に至る九ヵ年間に個人別に視力の推移がどのような経路をたどっているか、即ち縦の経過を調査し、管理と指導の一助に資したいと着手した。

調査方法

福野地域の中部、西部、北部、南部の各小学校から本校を経て、現在福野高校3年生に在学せる生徒65名を対象として、それぞれ9ヵ年間の視力を記入調査したものである。

(1) 学年別近視人員及び百分率

学 校	小 学 校			中 学 校			高 校		
学 年	4	5	6	1	2	3	1	2	3
近視人員	23	14	12	9	13	15	21	23	23
百分率	35.4	21.5	18.4	13.8	20.0	23.1	32.3	35.1	35.3

- 小学校4年に思わぬ高率を示す。これには低学年で視力表の判読理解不十分のため、あるいは僅かと思われるが遠視が含まれているのではないかと考えられる。
- 中学校3年より高校1年及び3年までは外の時期に比較し高率を示す。これは高校受験、大学受験への勉強が影響するものと推察される。

(2) 課程別近視状況(高校)

課程別人員	普通科(31名)			農業科(26名)			工業科(9名)		
学 年	1	2	3	1	2	3	1	2	3
近視人員	11	13	16	6	6	7	3	4	4
%	35.6	41.9	51.6	23.1	23.1	26.9	33.3	44.4	44.4

- 普通科、農業科、工業科に分けて、普通科多く、農業科の約2倍を示し
- 工業科は人員少なく、確実性がない。

(3) 学年の進むにつれてどのような傾向にあるか

小学校4年視力		小 学 校 6 年 視 力			
		1.0以上	0.9~0.7	0.6~0.4	0.3以下
1.0以上	42人	42人	0人	0人	0人
0.9~0.7	22	11	10	1	0
0.6~0.4	1	0	0	1	0
小学校6年視力		中 学 校 3 年 視 力			
1.0以上	53	50	2	1	0
0.9~0.7	10	0	5	4	1
0.6~0.4	2	0	1	1	0
中学校3年視力		高 等 学 校 3 年 視 力			
1.0以上	50	37	4	7	2
0.9~0.7	8	0	1	2	5
0.6~0.4	6	0	0	0	6
0.3以下	1	0	0	0	1
小学校4年視力		高 等 学 校 3 年 視 力			
1.0以上	42	35	2	1	4
0.9~0.7	22	2	3	8	9
0.6~0.4	1	0	0	0	1

○小学校4年の視力状況

高率を示す近視者の中、ほとんど0.9~0.7までの僅かの視力不足であったこと

○小学校時代

小学校時代における近視の約半数は快方に向かい、仮性近視であったといえる

○中学校時代

- ㊤ 小学校時代の近視のほとんど全部が、中学校時代でも近視であった
- ㊦ 中学校1年で仮性近視から回復したもののうち、真性近視になるものが多いので、特にこの時期の指導が必要である
- ㊧ ㊤㊦いずれも0.9~0.4までの軽度近視であった

○高校時代

- ㊨ 中学校で僅かの視力不足者(0.9~0.6)であったものが、この間においてほとんど100%視力減退し、しかもその低下状況は非常に急激で驚異的であったこと
- ㊩ また新たに正常視者の中から視力減退しているものが、中学時代に比較して特に多かった

○小中高9ヵ年間を通じて

- ㊪ 小学校4年から真性近視のものは、高校3年までに極度に視力は低下し、すべてが0.3以下の状態になった
- ㊫ 仮性近視が治癒して真性近視になったものは中学3年時代に多く、大部分が著しい視力の減退を示した(約3%)
- ㊬ 新たに視力不足者は高校1年~3年までが圧倒的であったこと、故に、この事実を通じ視力不足者の中から、中学校から高校へと高学年に行くに従い近視度が強まり、各人の不自由は申すに及ばず、大学受験、就職等に影響することを深く考えねばならない

◎生活調査（更に原因追求のため生活調査を行なってみる）

	正常視者	近視者
1. 電 燈		
スタンド使用	51.2%	66.1%
普通電燈使用	48.8%	33.9%
2. 電燈から机までの距離		
4 m以上離れているもの	29.5%	15.8%
4 m以下	70.5%	84.2%
3. 電 球		
60W以上の明るさ	37.5%	13.2%
60W以下	62.5%	86.8%
4. 勉 強 習 慣		
鉛筆の硬度はHB以上のもの使用	100%	75.0%
うすいもの使用	0	25.0%
読書中ねころんで本をよむくせ	4.8%	28.5%
読書中ねころんでよんだことがない	95.2%	71.5%
5. 勉 学 用 机		
椅 子 机	57.1%	20.8%
坐 り 机	42.9%	79.2%
6. 栄 養・食 習 慣		
甘いもの好き	28.5%	53.8%
余り好きでない	71.5%	46.2%
偏食するもの	2.4%	34.5%
偏食しないもの	97.6%	65.5%
7. 遺 伝		
両親に近視あるもの	2.4%	20.9%
〃 ないもの	97.6%	79.1%
8. 眼の病気（既往症）		
眼病をやった事のあるもの	0	16.6%
〃 ないもの	100%	83.4%

以上生活の一部を眺めても近視を発見させ、あるいは進行させる要素がたくさんあると考えるので、これが予防には

A 生活指導

1. 家庭における指導

- ①こたつ及びねころんでの読書
- ②家庭学習と机姿勢
- ③家庭の照度
- ④食事（偏食）

偏食のあるなしはあくまでも、自己評価であって日本人の食生活自身に問題点があるとする

2. 学校における指導

- ①学習指導
- ②検診後の適切な処置
- ③学校給食により偏食矯正

④女子の断髪 束髪

B 環境の整備

- ①ルックスの配慮
- ②黒板、壁の塗装
- ③座席の変更
- ④机、腰掛の適合配置
- ⑤カーテンの設置
- ⑥窓硝子の清掃
- ⑦立木伐採あるいは移植
- ⑧青空凝視習慣等が考えられる

結 論

この調査において高校3年で43.1%に達した近視をいかにすれば減らすことができたかを考えて見たい。

- 1) 小学校で1度0.9以下に視力が落ちた生徒（22名）は高校3年までにそのほとんどが近視になっている。

②ここで気を付けたいことは、その半数が（11名）小学校で1.0に回復していること、中学校時代もほぼ良好な視力を続けている。（53名→50名）これが、勉強の激しくなる高校で、生活調査でわかるような悪い要因も加わって調節負担がふえ、ついに近視となっている。

従って一度0.9～0.7から1.0に回復しても「自分は非常に近視になり易い」という自覚を充分持たせると共に、父兄にも注意をあたえ、学業を合理的に行ない、生活も近視予防法を充分守って行なえば、近視にならずにすんだものが多いと思われる。

③次に小学校で0.7～0.9で、1.0にならなかった生徒（10名）は、中学校、高校と次第に視力は落ちていっているが、この0.9～0.7の視力は、近視度にすれば-0.25D～-0.75Dでごく軽く、治療により1.0に回復するものが相当多いと思われるから、小学校のこの時期に適切な治療と指導を行なえば本人の自覚と家族の協力とによりここからの近視も減らすことができよう。

- 2) 小学校6年で1.0の視力を保ったものの中、約70%は高校3年まで1.0を保ったが、約5%が中学校で、約25%が高校で視力がおちている。

この視力低下も中学校、高校の定期視力検査で近視の発生を減らすことができるとと思われる。

以上小学校、中学校、高校を通じて視力の低下を発見次第適切な指導を行なえば、近視の発生を相当減少させることができると思われ、特に小学校時代の視力の監視と指導が、学校近視の増加を防ぐためには最も主要な役割を占めるとと思われる。

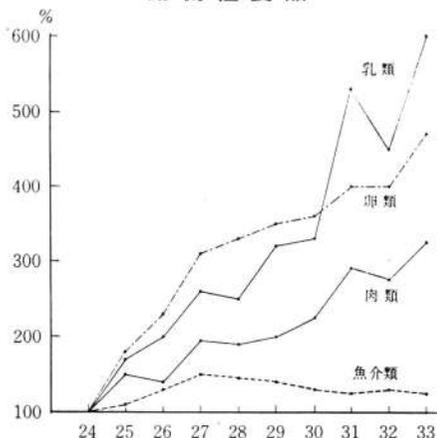
紙面のつごうで貴重な資料を削除しなければならなかったことをおわびします。

食品消費量の推移

(昭和24年=100)

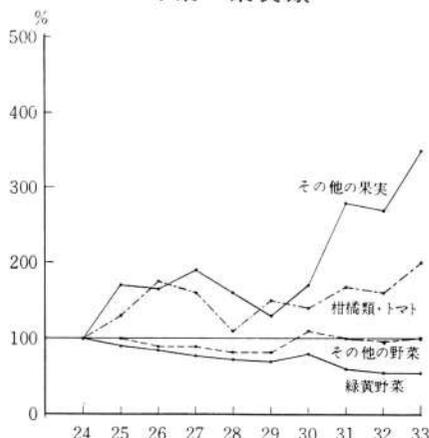
厚生省昭和33年度国民栄養調査成績

動物性食品



獣鳥肉類、卵類の伸びは乳類と共に魚介類の減少にも拘らず動物性食品の消費が顕著に増加している。

野菜・果実類



野菜・果実類はビタミン、ミネラルの重要な供給源であり、特にビタミンA.Cの大部分を占めている。
栄養価値の高い緑黄野菜が減って白色の野菜が喜ばれる傾向が見える。



カワイ

ビタミンAの含量の正確と安定度の高いカワイの製品

カワイ肝油ドロップ

カワイ総合肝油ドロップ

総合アドベリン錠

ネオアドベリン

カワイカルシウム錠

給食強化剤アドリッチ

ビタミンA アセテート

ビタミンA パルミテート

ドライフォーム結晶

新カワイ駆虫錠

製造発売元 **河合製薬株式会社**

東京都中野区野方町2-1171
電話東京(385)3111番(代表)

河合研究所

東京都中野区昭通通2-23
電話東京(361)3746・5891